



6 7 8 9 10 11



和漢文操卷之五

四季之明鏡

藤巴雀

扇を乞う。因のよつねや。身は。人を齋。整
とちよつて。身のがましとほくわく。
そく。あまされあり。秋の。身せ。凡て。身
のり。あましゆく。身を。身を。身を。身を。身
肺。身を。身を。身を。身を。身を。身を。身を。
身を。身を。身を。身を。身を。身を。身を。身を。

けかとゆきおきよしとせんじをもよのれと
えみまくはせねむしと麻うに稀稀いとおのめの
脚の木とくらととみあう神のみやんと骨と
葉をの色とやへて要と金をの色とくらと生骨
ありと骨あはばすねあうまゆうとあ月のあり
とくさうむしと流被とくさうは神のちゆ中陰
用とくさうとくさうの角とくさうの中陰と
我あるしむりとおと教れの一つめやられへ度す
ひがみとゆうと毫厘のひうりありとくらと
まくとくらとくらとくらと秋のじらとされ

風とあじ月のやわく。あるの香とよとひがよ
すえのあくまう相のまへのやまとく一例のあてよ
からやうにうととく度のやんめりとやうと
すだまくらとくらとくらとくらとくらと
とくらとくらとくらとくらとくらとくらと
くらとくらとくらとくらとくらとくらとくらと
くらとくらとくらとくらとくらとくらとくらと
くらとくらとくらとくらとくらとくらとくらと

卷之三

春と秋を以て詩と浮世とを以て考へられ
とかひむりうそとばくらやうらもくじゆまく
のれよて扇とえのくわらわゆくはく。小説の
まこと川とおぼえうきくすまよゆくさりあく
よしとくわか一秋とみのとくの氣とくとく
くまで小暮りをいがほきとくあくつ字やすつをく
の者をうゆすあくわびのとくに居たんまくに置
もむらもあくじゆくに離りとあるとまく秋も有
のえいきもあくじゆくに離りとあるとまく秋も有
かうくみのとくとくとくの居やうくまくとく

文淵閣卷五

三

のまへすよもまほむらち。お朋がわれやいとおじよ
きよすきよとくとくまくのまほむらち。お朋がわ
せ數の所。やうゆの浦のまほむら。實のまほ
みあわねとも一まほむら。まほむらをもよんた
はくちよとくとくを一やさかのまほむら。これよ
てそと落とされをも。印とひづりんやれどか
まほむらをかうえ。モモとあちふまほのま
桐のまほむら。印のまほむら。ちかこの麻糸と
とれくはらかの新郎と。お母よとよとよとよ
娘よとよとよの序よとよとよとよとよとよとよ

様と馬もいたる處へ牛の遊がり。一
首のまことに。あまく。秋のえれどやえれど
は春と云ふらむ。わねねの色めきみまく
あらへ。われのやうとひよこ

○註曰●怨歌行。新製齊純素皎潔如霜雪。●王建詩。輕
羅小扇撲流螢。○秋扇。詩歌。敷蔓アリ。夫キル乃ハス
△輕馬山ト神谷川ト竹ト綿トノ名所ナリ。涼山毛神谷綿トアリ。
△葛川平ノ西人ハ中古ニ浮世繪ノ名人ナリ。△唐サ納言カ持
玉串ニ扇。舟ノ跡ナラ奉ルト云。院内扇のつゝあててくしけ
のつゝやとツツ。△高僧傳ニ法顯。レ叢ノ天堂ニ渡りテ見
白紬扇。不覺。猿下云。或持云。中空ノ詠アリ。後勘スレ

○古人こそ、喜びてえまつたり。わがのまゝまゝ小天の
やうの中庸之道也者不可須臾離云。揃そ一社賛ハ扇
ニ不忘ニ二字ヲ取テ全篇ノ趣向上成セリ。字々不離ニ二字
ヲ假テ孔二字ヲ繫キタル。草段ノ起結、常法ニシテ器等ヲ
断續ノ絶妙ト称スレ。△金譜。背面裏人圖アリ。蘇子
鼎人行モ此類アリ。△原氏ノ文貞ハ前二山タリ。可めおどし
かぢゆすきあす七言アリ。六月亡むに實是也。自と体乳
ハ乞くちりとづク。●長恨。弓。簞。寒鳥。瓦冷。霜花。重。云
●龕山。雪夜詩。一炉。寒火。此。不盡酒。●盧仝。苦歌。入。半。及
父。七。重。上。半。貝。ノ。寓。言。ナ。リ。△片。竹。小。折。帝。の。す。ま。ア
ト。ひ。か。よ。ホ。ト。モ。ケ。ル。ハ。ア。聖。シ。ミ。ト。ア。ク。△禪錄。臘月
扇子トハ無用物喻す。○空家にて、事友人と

○おひじ賛を例の辯利とよんでほりせゆ
とくしてその用とほんと爲の
事もあらむとも何んのよ鋒よりまことにわ

まうてかとて言すの歌物といへるへれや
ては事のと記と稱せらんやカ一ト不思のにてよと
とて空手の歌詞ととあくまの新様のばむとて
アリて起承のばむとてある一毛色

國賛

並序

僧集泉

もとより我あく扇と和訓をすへあゆみて
われやまくに國^{クチハ}扇とす和訓をいふものなり
さうが一^{クシ}と能活の書にて國^{クシ}のてよと歌
きくわら津^{シマ}とすとせば歌り扇としや國^{クシ}
丸て音訓のアシヒトのいさくあくお陵

國^{クシ}裏もれ明^{アキ}羽扇^{ハシマ}もと扇^{ハシマ}國^{クシ}とすやれあ
しニ^{クシ}の名あらと^{クシ}一^{クシ}れ^{クシ}扇^{ハシマ}のからもす^{クシ}金^{クシ}
扇^{ハシマ}金^{クシ}一^{クシ}國^{クシ}と^{クシ}あ^{クシ}金^{クシ}扇^{ハシマ}と
も^{クシ}も^{クシ}あ^{クシ}扇^{ハシマ}と^{クシ}あ^{クシ}金^{クシ}扇^{ハシマ}と^{クシ}あ^{クシ}金^{クシ}

其贊

礼^ト云樂^ト云團[、]離^ル名^ト扇[、]知[、]若[、]明[、]暗[、]
時^ト鳥[、]又^ト曉[、]拂^テ塵[、]隱^ル招^テ風[、]讀^ム文[、]
信^玄[、]鋗^甲[、]兒^玉[、]宝^紋[、]胡[、]原[、]金^鳳[、]
母^乃[、]追^敵[、]無^常[、]蒙^佛[、]有[、]憲[、]怒[、]石[、]

君化^{シテ}尊^{トラ}去^カ加^{セヨ}言^シ遊^シ云^ニ

○註曰△論詣^ニ礼樂^ニ向^前出^{エリ} ▲軍史^ニ甲裝^ノ信玄^ノ床^{ルニ}腰^ヲ掛^テ軍配^ヲ叙^{セル}國八信^{サノ}川中島^{ニテ}謙^信ト^ノ軍^{ナリ△}兒王^{コタニ}黨^ハ關東^ノ武士^{ナリ}團^ヲ以^チ效^トセり ●文選詩^金作^ス秦王^好事^好事^向煙霧^{良註}言^金北^於扇上^以墨^之本^モ布^モ鳳^モ列仙傳^ニ奏^穆公^ノナリト ▲和泉^ノ家原寺建立^ノ時^ニ行^基善^薩隆^ヲ遁^ス師^ニ本^萬ヲ^團羽^ノ上^ニ掌^置玉^ヲ夏^{アリ} ●憲^ニ怒^ム石^トハ班^ナ怨歌行^シ云^リ前^ニ出^{エリ}擇^ス元^ニ一對^ハ聯句^ニ座^ソ古法^{アリテ}無^ト有^ラ對^シ常^ト憲^シ對^ス憲^ニ無^常ト^ハ和歌^ノ續^キニ^テ俳文^ニ字^對ノ絕妙^ト稀^{ヘレ} ●詩經^邶風^加馬^言出^テ遊^シ云

○ほ、ひけ替^フと真名^の和訓^あう一宇^も漫文^の詮^勝と
まつも他^はと叶^韵の邊^とふ^ーはんく席^すす^言訓^ハ所^所と或^もを團^めと^意す^るも^へ或^もを團^めと^訓ふ^ーよ^とま^るへ仰^の詠^玉と^いて^シ詠^と圓^くと^字對^ちり^シれ^ハ詠^文の用^あり^テ今^もひけ替^フと^仰文^とか^と一^一作^者を^かの^中よ^あ生^まを^切手^よお花^お花^おと^原と^テ柳^葉の^ニ子^とか^すも^りを^よお^み入^まを^まま^まえ^院よ^行き^まと^我真^言の^學所^也

福神贊

長説

世界^ノ無^ノ物^トあ^れ食^ミ能^ミ物^トす^アア

せうをもぬといのれとぞ貧どひる人ふされば汝身
よ神さむひく今と富すあへ神はあへん御へりく
と取えあるをすたる者とキとてまつてまつて
食名の稱とせじきりと稱名の食とおそれと
せけふ仰むけに活あひて辯文天の虛空がい
故仰あやくわうとゆと觀音大士とほす波沙モハ故
ちねうて補陀洛界と五部とかく唐アヒルヤー
ルセとらて耶多羅波羅摩とてとひく般若
の奥とく能くすまんふばの越後をの基とすわろを
一絶二絶の塵はくめてゆくつて里とづくみのとく

三子國か一だれか中から真萬葉聲^{アラス}聲と子孫^{アサ}聲事
所跡のあうきやくす言ひとすくとやこれと食名稱の
さうひととくわくとおみ壽の和とつまくや林のあは
道のわあわわわわわわわわわわわわわわわわわ
神御めぐへとくくわう縫涌とがくかくよく新故と
まくわくしの知とと不^シとせんじくわの宮^ノ稱と
あくとくやくやく津の傳音^{アカ}と高人^{アマ}近思錄^{アマ}と
塵却だくくらまとそく御宿の良^{アマ}みやうとくはね^{アマ}室
の水とみの舟一舟は船^{アマ}とおとくわなと
延^{アマ}とくわな

○ほ云は既と例の被徒^{シテ}て往くるとすれどもを
を一念の称する不食食のゆとみんむと神^{カミ}お^{カミ}
食とおそれと傳仰のる事より左兵の三行^{ミツノウ}が
没するあらとテモ地獄の微中^{ミツノウ}アキモトモ地獄
トモヌテ斧や天と虚空^{ムカシ}あら神と仰の起終^ス
觀音大士と草薙^{スサノオ}魔と文中の事^{シテ}とぞり
もうに遺教の知足といひて念佛のニキと云ふ
近くと一綱の観^{クン}傳^{トシ}とづき遠くと古^{イニ}のを訓^ルいふも
作^{ハシ}と長野^{ナガノ}と越^{カムイ}の新^{ハシ}と此^{ハシ}柱^{ハシ}とぞと櫛子^{ハシ}
の親^{ハシ}と鎧^{ハシ}の兩翼^{ハシ}と一團人^{ハシ}門^{ハシ}様^{ハシ}を

卷之二

蓮二房

五子四

擊^{ヒタチ}而^{アシス}管^{クニ}

蓮二云

以あやめに作といひし

○ほ云は既と例の被徒^{シテ}て往くるとすれどもを
を一念の称する不食食のゆとみんむと神^{カミ}お^{カミ}
食とおそれと傳仰のる事より左兵の三行^{ミツノウ}が
没するあらとテモ地獄の微中^{ミツノウ}アキモトモ地獄
トモヌテ斧や天と虚空^{ムカシ}あら神と仰の起終^ス
觀音大士と草薙^{スサノオ}魔と文中の事^{シテ}とぞり
もうに遺教の知足といひて念佛のニキと云ふ
近くと一綱の観^{クン}傳^{トシ}とづき遠くと古^{イニ}のを訓^ルいふも
作^{ハシ}と長野^{ナガノ}と越^{カムイ}の新^{ハシ}と此^{ハシ}柱^{ハシ}とぞと櫛子^{ハシ}
の親^{ハシ}と鎧^{ハシ}の兩翼^{ハシ}と一團人^{ハシ}門^{ハシ}様^{ハシ}を

よのじとお葉のえ不^{ハシ}て
海の^{ハシ}と^{ハシ}あらふ^{ハシ}も

王頤圖贊

東華坊

世傳齶吸之圖，有塗梅儒叔老之之道，而酸苦耳矣。苦六所謂人之好不好，嚮半怒辱有。世愚謂物教奇事而飽不有耳。予不有苦，莫塞麼月夜之未寢，則至難其寢，而妄言也。所酸了也，增而好納，豆人者妄言其為饑臭，尔哉孰辱謂道？是矣孰辱謂道之非矣。攻乎異端斯害也已。抑謂太極之道者，從本一而之道也。其分千車万馬之歧而或

者打鳴念佛之鉢，定或者橫倒參禪之棒，究此取午者詭虛，午彼貯亦者說實，午儒家結五常之垣，則佛門張五戒之網，而立斷往來之道，則老子者說手振千貫而割牛羊折衡，午為家天地而鋌麼不卸特擴我好之道，兩所率哉謂佛諸之道者，汲合三家之意味而塗梅和渥之风雅，了則人法者，從孔子之訛謹居心法者傳，老子之靈靈，些文法者效，在子之形容，歷然則非儒，非佛兮不攜，老在楊墨之一城兮假令謂

叙迎孔子之御經。共知言詣之用與無用。了則其虛靡合點。了其審靡合點。何不。可。義。暗許之黑豆。阜。全。徒。妄。而。曉。人。極。靡。故。望。而。遊。有。俳。諧。之。誇。笑。也。乍。去。乘。人。之。味。線。而。遊。芳。野。山。之。花。了。靡。難。波。浦。之。風。而。頗。葭。乍。頗。廿。月。于。雪。也。則。立。合。點。人。取。之。憂。名。而。成。早。學。文。之。日。備。也。矣。ニ。子。能。察。我。言。之。虛。冥。而。學。而。思。乍。思。而。學。乍。知。今。日。之。用。與。無。用。則。究。賢。字。豐。千。之。說。舌。而。看。破。獅。子。庵。之。遺。稿。笑。爾。首。則。

所謂三人行。則必有我。而。互。合。點。丈。殊。智。慮。至。平。圖。者。頗。儒。佛。老。之。內。證。而。可。謂。能。諳。一。宗。之。判。物。矣。夫。

○註。日。醋。吸。三。聖。母。多。年。國。十。り。近。ク。ハ。繪。本。抄。三。註。解。ア。リ。△。傳。詔。拾。苏。何。毛。月。夜。三。葉。汁。未。湯。ト。云。ル。ハ。未。飯。ナ。リ。ト。多。ハ。米。飯。ト。平。詔。ニ。讀。レ。△。異。端。ハ。論。詔。ノ。全。文。ナ。リ。掩。ス。ニ。詔。ハ。改。ナ。ラ。始。字。ノ。論。ア。ヒ。ト。孔。子。ノ。意。ラ。案。ス。六。道。家。序。建。流。ア。リ。テ。佛。老。モ。楊。墨。モ。一。理。ア。ヒ。辭。言。ヒ。我。家。ノ。建。立。テ。自。ラ。參。言。ア。他。ラ。殿。ル。压。宣。ニ。怒。リ。テ。責。ヘ。カラ。ス。ト。フ。石。ハ。先。後。折。ノ。取。意。ナ。リ。△。五。常。五。戒。ハ。儒。仏。ノ。制。法。ナ。リ。細。奉。ス。ル。ニ。及。ハ。ス。△。老子。割。ナ。折。衡。ハ。天。地。家。モ。其。經。ノ。取。意。ナ。リ。掩。ス。レ。

手振千貫トハ一錢ノ基手モ持ヌ大商ノ平詔トハ老子
ノ五千余言ヲ縞ナリ四字ニ詠着ストムケシ等ヲ奪胎
トモ換骨トモ文ニ詠諧ノ絶妙ト称スレ △宋詔子曰
諫君有五美 中畧五詎諫唯度全而行之吾從諫諫
手トアリ史記傳稽旨賛常以諫笑詎諫云△仏說心本
虛妄正禪詔 虚妄不時因總入心ノ實財十キ豆ニ△莊子
形容ニキハ全部ノ趣意十カラニ賴ニ無情 形ヲ空レ危丁ニ
有情ノ客ラニセリ總テ佛詔ノ鼓舞ナリ 指石ニ而設三章
ニニ雲ノ法アリテ佛詔ノ優游ラニシテ形容ハ文章ノ的當
ラニル矣ナリ賛ノ肯節ニシテ佛門ノ虛妄公案スキナリ
△禪錄 暗黒室老和尚トハ塔ノ明ヌト云々瞿曇ナリ △味根

△線ナリハシムノ通音音詔ナリト俗習ニ達テ味字ヲ加フニ和詞
ニ細訓アリ多ミ芳野山トムイ向山トムテニ線ノ年ニ〇新千載
トアリ人トタリを近ヘテニシテ佛ヌトシ也シ密勿トシ
難波ニ善惡ノ歌ハ敷カシテ△學文ノ日傭ハ白馬ノ詞ニ文章
訓ナシムハ當時の字名蓮の万葉の表とあたる也シテ東夷の
一物と考スナリ也吉竹抄メ切アリト後と向れアリテ子ヒ
自己の援用シレバセシトテ子ヒノ口傭トアリヤハ換スルニ
此段ハニ線ノ手ヨリ言錦山トムテ難波浦ニ向ラ對シ言詔ノ善
惡ニ語ラ寄スハ今聖人教ノ詠諧ナル學文ノ日傭ノ約當ナル
竹等ハ例ノ断續ナカフ文ニ裁断ノ絶妙ト称スレ△論詔學
不思則罔思而不學則殆△高僧傳ニ寒山拾得ハ文殊
普賢化身ナリト豐干和尚ノ教示依テ向丘徹ハ國清寺ミ

往テ西僧ヲ観セニ豊干饅古弘陀トモテ電丘前ヨリ逃走
ト饅古トハロミメナシ夏ナリムニ人行ノ詣ハ論詔ノ全文△文殊
智惠ノ古ヌ細峯ニ及バスニ人寄大文殊ノ智惠トハ本朝ノ國詔
ニシテ老子詞ノ起結ナリ揃瓦ニニ子以下ハ豊干ノ饅古ニ詔ヲ
起シテ寒山拾得自在ラクテ蓮ニト自在トニ喻えニ頑ノ秘
訣ハ穴段ニ看破スレ為ヒ今云フニ頑ハ圓相中ニ半身像
アリテ東革坊ト蓮ニ房ト渡御狂トナリ其圓六文和詞
ノ首丁ニ出タリ

○ほ云け圓を極子庵の遣行ナリて或と之作の聲ナリ
或と蓮ニの聲ナリありづれも百舌の聲ナリ也
あぬじく下つじくも滅りやせぢよふしきの聲ハ
むし五毛井のおな奇より尾聲のを極庵アリ圓と

等其のへ心觀ひゆそと圓一ト荷符又幅
七幅もある一トはれへけ圓のや擅とある難波は遠藤
ノ祖翁の余ともいへ他端のせたとてせよほんと
いあらわよお仰の大にあらより極子庵ト不淨の
迷福とほめて今や天下の公道とわれらニ頑ノ例の
所仰上仰ナリて合院のうまにけ聲と肴がまに
あらわれ子の俗常とあらじ家業の二事とわらば了
スリ荷擔の用とあらつまゆれと升れと削の連場

路易贊

金李潭

近来帝の仰玉辰不すよ活まると我朝北

ましめひちかく金をあけぬをもとすかひもて
えりふれよかれわざもじれゆるて諭語の通
かよきとあうとげきよのまことせよやまくゆくと
くわくらむじくはりきよもあはれくはゆく
もああくよんのをとひくちか一トはくと
まちくはとさとそとしかくわくとほく厚底の單
ときをみずきを部のひととひくひくあぢにかね
ぬすせ送作ぢりよきるとほくひくはあぢれ
風浪ひくともあれとおとせよみかとの
みとみと生えと生えとせよみかとの

の帝と皆ともぞひて文の断猿とあらま也作者と
藝の魔なるをすと今其の能人あり

○頌類

枚子頌

伴東林

せとえ食にのしやに食と天とて才とをも
い新ひれ子のばく余差毛囃西施うこすこす
岭れを而ぬしめあけ不我わづけちうじ
そく序橋のすとて婦よかむりのあく不第
一枚子のよほよほりあまのゆきを慶あし金天歌

七代も地神みやしとやもととすくひ人の代あぐ
あるとすりて歸路のゆゑ金の旅へ新妻あ
ゆきとあふやくて新婦入る。新うすはあくとすと
不時事にあたても名のありなれどす院へゆく
とよそをかくとく我歎のゆびふさわく柄枚う
枚子うれすましもんへ。あすは能作の日用と説き
おもしろくね連音あくすうせとくと長ち知悉
もすは嘗てのよ詠あくすはよやみ葉田のうづ
さくら葉、下風うす。旅のよすもととみきとよひ歎
のれ歎きしりお持御手の心腹うそくわざわす中

うけねすと、神代と神の御事と先づて有候
よ及づるも事よりぞもち。信もの信まのくをもり
の骨をかゝて秋あめ玉をとあさむとぞにひき
はせりてはとかれけへ百万の敵をしやうせ遊り
をあらむ一枚子よ、十万人ともくわづひよされ
仰たとひすらとつひ。己經の神事とす。并のばせ
りとと万民の幸と實とす。

○註曰△菅子王者以軍人、鳥天ト軍人以食鳥天△天淳橋ニ
逆ノ弓又日本紀ニ在り細舉ニ及ハス。△也く御久我翁
ハ國ぐうてゆとメキテ、よきよよきとせり。△也く御久我翁

そりきり擇スル曲ノ古スハ先師のばれくの讀ヘ、然後ハ場内歎
花者とぞ、うとぞ、又秋歎のす。皆作とづれ、曲と柄致と
清宣とぞ、詠歌の穿著あト云。○万葉集、家、有者
翁、盛、飯、年、拵、族、余、有者、鴻、等、不、成、
△美政公ナリ文明ニ太平ニテ茶湯道具ナト名物多シ
△之井末トハ神供ノ質朴ヲ云リ神代、美ニヨリ。△織田信長
モ武田信玄モ天下モ雄ト稀矣天文此ノ名將ナリ。△遊行
縁起ニ苦心和布ノ枝子ノ古スマリ八十万人決定往生トハ廻向符
ニ頂戴スル秘符ナリトス。擇スル童謡ニ枝子三三人ラ招ケ
心ス孔スルトテ忌ム古ナリ何故ミヤ知ラス。△三種神器ハ神
璽宝剣内侍所ナリ細舉ニ及ハス
○遂、五山領主削の鹿説、仰れと折を神代の事劍

よりやせと朝達の内店にて換と仰はとみたまふ
のちあまと称すり行ひうら不とされよの裁断となり
頃射そとふへきや作事と仰吹キテ越の敦賀
より佐多と能清を柳子内の款ゆきて以幅對め撰若
うち桂下園を徳の跡矣あり

醋臭頃

僧壺天

薩摩よりやあ酒をすよ浦とゆふくでモモ
みそもろこしが△天かまくらにせのまがる自然
の氣と生ひて天名と△即ちあるべし
津と云ふ字の由りて耳目爲はのちうとがま

一毛の晴天を以て桂木をもぢて居り
坐すとあつて横よどむありてあくと面と
ありて妹背の内にあすけたる様じよと
の處おとをちやうのとくゆくとて写さざ
ましをつゝあはれと相思子ともうめをや
き様を數とえりてやまとあふてやされ
おおむねの事かつづれて珊瑚琥珀の美玉を
あれは貞の頃よりおとて國忠孫属うおとて
葛生を城う玉丹ともちよとそとい浦竹を
門も高うれしく色あまくと毛まわげ

行在所當以爲之也

卷之三

十七

○註曰△天地ノ方圓ノ前ニ出ナリ△海槎錄相思子大加宣示即
卽君子也或云放體中雌雄相逐便合便下云
國忠ノ肉屏凡ノ奢者アリ孫良ハ肉甚至盤奢者アリ細浮スルニ文
繁シ△神仙傳菖蒲ノ仙人ナリ老君域ハ天皇ノ神人ナリ
爰舟トハ延齡舟ノ號ナリ浦嶋ナ故古又ハ前ニ山山ナリ
○説云しそうとあらわれ知能五了了法語ト義園玉舟の訓
詞「う角」の字と「う」の字と「う」の字と「う」の字と「う」
えと秋頃の文字と「う」の字と「う」の字と「う」の字と「う」
彦の文殊院住む柳眼ナシと南岳の極等ナリ

大根頌

OB
賛柳

主が國へのふとやうと森口とはゆのとあま連うち
られ、立井と武陵の大名をやうやくわかれ、後漢
へ薦められて、もやさむかへて森の出れうつうきと
きくじゆうと、活産和焉とまでいふのと
かやうじゆう松のそれと、かとうじゆうてわざく漢の
名とやうれりゆて、祚、歲月の暮からりじふると
夙、星宿の星とゆきと、人をけのあとと、ぐらきの
星と、吉とひと、凶とひとがましよくある。難者、災の
来とじて、旱に牛房の一あはぬ、毎くじび鶴の聲がよ
えうらじくせどくようと、祚、歲月のやうやく代への

事代きりなどあれど、かうく、破はれてもよ
きくら、青蘿のりきくらをすゆとおとたぐと、青
蘿のからくとえひもとにせぎと、ゆあくゆ
あきゆかく、かうく、連くすと、お葉のばやあり、詞
もあく、他傍と大根の金くら、名とううふ
も、ばかくのおゆわよもよのうよ、やまうれす
ト、ト、すれよと、せ下のいは、あうと、ハ、古と、も、の、罪
のゆかにあらみの積善墓とえと、太根りと、^{タイコニキ}、
詞と、す月のまに、まくらが、と、まくらが、太根
と、す月のまに、まくらが、と、まくらが、

○註曰、夙土記、鎮竹、蘿蔔、之產土也云。詔、禪錦、數多、
△名美、佳也。詭、訛、訛也。ト云、ハ天台、天梯、也。知、メイコラ、テイコ
知、国詞、ノナリ、トス。梅、スル、ニ本朝、儒學者、訛、字ラ、訛錯、ト
思、テ、訛、ナ、ト假、名ラ、附、え、更、レ、く、の、譯、ニ、論、アリ。

△官、ナヨリ、差、井、ニテ、シ、對、ノ、相、紋、ニ、文、章、ノ、斷、續、アリ、テ、尾、張、ハ、官、畜、ト
エ、イ、義、農、ハ、鏡、嶋、ト、云、フ、ハ、對、ハ、大、少、ノ、起、結、ナ、木、口、ハ、接、津、ニ、細、根、
柏、濟、ラ、產、ト、ス、差、井、ハ、武、藏、ナ、イ、葉、大、根、ラ、出、ゼ、リ、梅、スル、ニ、對、
始、六、君、根、ノ、豔、詞、ラ、起、レ、長、梢、ノ、長、字、ヨリ、大、根、ノ、大、字、ラ、結、
尾、張、ト、義、農、ト、ハ、大、少、ノ、辨、ニ、シ、テ、木、以、ロ、ト、差、井、ハ、產、ノ、名、稱、ナ、
ナ、ハ、官、ナ、ト、遊、石、ハ、字、對、ト、エ、イ、句、對、ト、云、イ、論、セ、ハ、文、對、ノ、絕、妙、ト
称、ス、ク、義、農、ト、尾、張、ハ、大、少、ノ、用、ナ、ヤ、ラ、評、セ、ハ、意、對、ノ、絕、妙、ト
稱、ス、レ、文、章、ハ、而、等、ノ、斷、續、ニ、知、キ、ナ、リ。△、伏、庵、濟、ト、ハ、櫟、

名、ナ、ヨリ、差、井、ラ、善、蘿、濟、ト、ハ、櫟、ノ、名、ラ、替、テ、櫻、ニ、櫟、ラ、又、セ、テ、濟、
夏、ナ、イ、ト、フ。△、神、農、而、竹、ラ、膏、肓、而、出、タ、リ。△、は、れ、テ、竹、
大、根、化、身、ラ、ミ、ア、ト、テ、カ、ル、自、ナ、イ、ト、内、ナ、イ、ト、ソ、ヒ、ト、夫、ナ、リ、ト、ア、
▲、猿、震、第、ハ、落、柿、舍、ノ、櫻、ナ、キ、冬、却、大、根、ナ、リ、と、ふ、子、ト、と、
ふ、ち、あ、う、テ、鶴、つ、わ、ト、ハ、ジ、ト、サ、サ、や、大、根、ナ、リ、と、ソ、シ、喬、
あ、く、櫻、ス、ル、ニ、前、害、ハ、西、未、チ、ノ、題、名、ニ、大、根、引、ト、云、フ、ラ、冬、郊、ニ
定、キ、辱、ナ、リ、せ、等、ラ、遷、場、ノ、廊、ナ、六、ト、白、馬、ノ、類、說、ニ、け、評、
○、ほ、云、け、空、而、ト、モ、空、ト、頃、解、ち、ら、ド、リ、神、農、の、テ、す、ム、
ね、と、ほ、を、モ、テ、お、延、の、比、古、ト、孫、モ、ト、モ、ナ、レ、モ、サ、モ、物、
ひ、ト、の、お、素、ナ、ト、例、ト、文、帝、の、る、よ、と、も、了、大、根、引、の、詞、
他、谐、と、称、ト、連、辛、不、敵、モ、ジ、ト、モ、ナ、ア、モ、サ、モ、物、
作、象、ス、ル、ス、^ス、而、年、ナ、リ、伊、勢、の、章、名、ト、伍、モ、キ、ア、ガ、早、モ、

○辨類

二上辨

僧丈竹

せいから歌とあまかくのこ上のひとちがまわら
鞍上枕と廻とこやまも一鞍ノ月弓をそら
もへきるせんかしのまわらかくすて店ら筋下ら
おさまくやん沒や車中しわまと様とて詩と
葉をまくの袖のくじをかくやまも或も松と連
よまゆとするあのあくとまやつやまひむま
わくまくねまくまれとまやまちまかくわくわく

御室のゆけりうはくらむれあさやまく松の上
もと竹子のやまくまくあまれむこれまくと袖と
ぬすのんとちくまく松上まく寒婦の腰とまくと
まくまくと廻とまくとほまくと人のまくとまく
とまくまくとまくまくとまくまくとまくまく
とまくまくとまくまくとまくまくとまくまく
とまくまくとまくまくとまくまくとまくまく
とまくまくとまくまくとまくまくとまくまく

○註曰△帰田録ニ思索文字トドク在於上所謂馬上廁上枕
上せ△主和壁賦馬上横アシテ潮州賦詩云
詩支松山齋一觴始奇○新古今詒考より
あきげあらわふれゆきゆうと△軍史信長云
長雪隠ノ向三蘭丸ア太刀ラ持カラ割鞘ノ敷ラ羨覺人
えん類す△無量壽經貝定五劫思惟云△源氏六十帖
ノ無向八湖水ノ觀相二字ヒ上部船絶ラ作レリトフ

卷之三

苗寧院

○はいは辯ち娘妻のよだてよりまたとて
さすがにあらたむきの訴詣より仰ゆる思惟とあり
淳氏の歌わく今ぞするべくと虚ゆくと宋とりひて
こゝに辯ちよ優游とあるて一モ唐と文鑄とて
舊内侍のふとありと湖南の松やよしめ遺跡あり
苗寧院

おまかでとまく令婦のかくことどりをもて
ゆふうせむとむくはくはうにれぞとまく
おのめえすかれそんぐを畜あとのとまく
楚王の駒も直にひまへばて西漢義人うあ
さやくへい。震帝の軍と馬車をもれて極東を
血とまみねうれ、麥城のひまくあらんそれ、中
ももからうらぐ人のたゞ震度の衣食とがまく五階
ウトにさくとかく、かじづりと本をとあさせびゆと
かくセ猿と歎中相識とまく。靈巖の霧と
かくとさくとまく相お手のたゞあさせびゆ

事と舞を設ておのまくとあくと玉舞うへうとまく
おがく西行は御のまくおの猪とみゆくへうきくい
とくあくと金とくまくと一組と青竹とくとえ
のふせえにとさくとくとくわくと、主船とすくとく
い船はく事えの市とくとくとあるとおめととあよ
桐とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
のちれへとくとくとくとくとくとくとくとくと
おのをとだり入てとくとくとくとくとくと
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
てとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

ひいえとよの御すもれに筆のがて筆はよ
をとやあよの筆すもれとがす筆のひだり
ぬの指揮よばうわく筆とびきあらかわせ
あさすすじて筆すもれと筆すもれとあるす
筆すもれと筆すもれと筆すもれとあるす
のねむと筆すもれと筆すもれとあるす
筆すもれと筆すもれと筆すもれとあるす
筆すもれと筆すもれと筆すもれとあるす
筆すもれと筆すもれと筆すもれとあるす
筆すもれと筆すもれと筆すもれとあるす
筆すもれと筆すもれと筆すもれとあるす
筆すもれと筆すもれと筆すもれとあるす

ちり月よけむれゆるモトアリサルヒトム月ねる
モトアリサルヒトム月ねるモトアリサルヒトム
月ねるモトアリサルヒトム月ねるモトアリサルヒトム
月ねるモトアリサルヒトム月ねるモトアリサルヒトム
月ねるモトアリサルヒトム月ねるモトアリサルヒトム
月ねるモトアリサルヒトム月ねるモトアリサルヒトム
月ねるモトアリサルヒトム月ねるモトアリサルヒトム
月ねるモトアリサルヒトム月ねるモトアリサルヒトム
月ねるモトアリサルヒトム月ねるモトアリサルヒトム
月ねるモトアリサルヒトム月ねるモトアリサルヒトム

人のうじんやむじと妻のゆゑめあひ。知らへばう
父さんもよしと不恵とあるあれへあひ。あひ
行ふことをわくやのむせよりはあらう。
かくや

○註曰▲松双扉。うづきゆ止門稀をかくゆりたり。とて
金扉のかくゆり。とあり。▲左傳衛懿公好鶴
乗_ス輜車云。史記楚項羽歌。九校山々氣蒸雲々。時正
利_ル離不世_ル。震_ル震_ル。秦若_チ何_一。草江_ハ敗軍
ノ地_リ。居_ス家_ニ。夏_ハ前_ニ出_タ。▲國太_ハ夏_ハ太平記ニアリ
相模入道ノ遊_ス。○長恨歌。驚破霓裳羽衣曲云
▲晉史王羲之好鵝。每_ニ山陰道_ニ。每_ニ道_ニ徑_ヲ捨_テ鵝_ヲ推_フ。云
▲東鑑ニ云。銀作_ス。描_フ被_フ。元_ハ贈物西行上人乍_ラ我領_ス。之_ヲ行_フ

與_フ放逐。與_フ兒_ニ。▲編年通諺。龐居士伴_フ。是昭_ヒ隱居_ス
深山_ニ賣_フ竹席_ヲ離_フ給_ス。朝夕食_フ。▲女帝坐_カ。焦_ク尾琴_ヲ
モ仲景_カ古懷_万年_ノ。琴_モ總_テ桐_ヲ作_リ。ト_リ。▲王夷_ニ
臺_ア。一日與_フ。君哉_ト云_フ。○日_アト_ハ嘗_ニ声_ニ月星_ヲ
ト_ト金韻_ノ。長_キ三_光ノ引_シ。ト_テ世_ニ秘藏_{スル}。古琴_ア。リ_ハ梅_{スル}ニ
ト_ト字_ハ和漢_ノ助語辭_ヲ。明_ナス_ラ先師_ノ大_ハ和_詞。ア_イウ_。
チ_ノ。叙文_{ヨリ}始_テ。和_訓ノ用_ト成_レ。リ_ハ壁_ニ。承_キ。人_ノ詞_鑑。ヒ_ハ
モ_ハ。モ_ハ。モ_ハ。難_ク。同_ヒ。ト_ハ増_テ。書_法ナ_シ。恐_レヒ。字_ノ和_訓
ラ得_テ。大_ハ和_ノ當_用。称_ス。キ_ナ。△詩文_ニ。亂_章。狂_章。老_章
ト_ハ寔_ノ。尊_ナ。△益_謹。金_文。阜_ト。尊_ノ。名_ナ。○古_テ第_二
あさがり。喜_ム。可_え。の。和_前。生_ム。人_ト。あら_ム。金_文。釋_ス。子_ニ
そ_の。水_ヲ。也_ハ。可_え。と_ハ。可_え。と_ハ。可_え。と_ハ。可_え。と_ハ。可_え。と_ハ

○室家を振して、まよひたる事やあらへ少間か
せやあらき。△松又角と草ヲ難シテ、かすみの如くせんそ
こもつてあり長保丙亥裏トハ清ナ納言ヤヒナリ。○方葉
長歌、字あらいあせれときをひとりむアレ。△又
「おとせやとありよねえ。」△ハ湖が色梅スニ和詞ニ候語ハ
這箇トキラ語ハ這箇トキラ。エコハ唐音シト里各セリ何モ
措輪詞ナト無ハ詩カ父ニト書キニテ△説文ニ良ハ辱也リ
カ尊ハ右辱也トソヘ知花ノ尊トハ時尊ラ指セリ。梅也ニ白
ハ梅ト竹トニ知花ラ結テ。○が文ノ起結ナカラ夏ニ時尊ノ憂也
ヲ隠シタル文ノ断續ハ更ニシテ法ハ隠見ノ絶妙ト称スレ
○併云げ辨ノ方折ゆゑナリ。妄狂の言とまつて
辨の如キと云フ一辨と一角の稱也。余と云ふは有

と押うておふて手をもつてねじまると懷うて
正氣を思すの懷憂もふの哀衷あるとてとて
父や父子の居と「やうニモ北遊故」とやうやうの例の
詠詩もさうしたる句をも

東桐舎辨

蓮二房

越の山川とすりすむ。東若坊と仰。東桐舎
の子とやるもいぬ新と年とかまね明かに
あくびせばの進退もまれにやうと東桐
のうと辨ととと東陽のことをもうと桐の

七自也と云ふやうより壽匠の杖と引ひて、^{スミカ子}剣鉤の
空あつてあんばい詳々柄様のをもやううりて栗本柄の
用とあざれねとあるのをちりとあわせ持^{ナケテ}
用ゆ^ノもあらぬけ桐の引ひやさとやうあへど
柳柳の肩すもはくをそよぐとて、累まするす
わうきをやけて用ゆ^ノくと又まかわらまくま
唐版の圓と丸^ノと在りと、豐臣のをよしよしら
とくに宋の名とあるとて障子骨^ノひれ火^ノす箱
とくわ^ノとちの家のをこれもあくべ御所^ノ
あすへも官禄の内^ノ臂^ノをもるとも町人百姓の
のスやのをありとせ

○註曰▲周史成王前^テ梧桐葉以^テ爲圭而授^テ君叔虞^ノ曰
余以^テ此封^{シテ}汝^ノ▲歷代備考天正十四年秀吉住關
白改^{ナシ}譽臣^ト云^ハ梅スルニ對ハ例ニ和漢^ノ當用^{ナシ}ラ
其葉ト云イ其花ト云^ハ文ニ互照^ノ絶妙ト称スレ^ハ謫語
大哉君子博学而無所^ハ各擇^ス不^ハ成名^ハ君子ハ^ハ義^ニ
限^ス口物^ハ用^ハ人^ハ大哉ト稱美^シ朱註三憲^ノ詭ハ

卷之三

卷之三

文意不審ト先後竹難向アリ △前漢楊雄傳 高明之家思鬼賦
其室ノ△莊子卷實之賓毛△古宋氏石枕免別丘
ナニ文鑑ニ名録アリテ柳子門ノ親也ナ
○源氏は辯と相の多能う例よ所謂の温厲と云フ也に
つて角とあしともレツモレタと辯ゆる宜アリて云々と
訛諺の證トアラクニモキシを増山氏アリテ越の福井
考もとが山の家號更令ムラカミ今り名古屋家
ヨリナリヒナリく松門と傳ヒニ子の風也と云ふ人

佐志枕辨

紀極因

あやめよ水辺の空に
杜あらぢれとるによるて

いゆるこあくまじてはよゑうとおゆく
被りゆふと私あれど我はともべいふ被りもれ
ハ我つまよせきをまきに車の軌道の所によくの傍遊と
立候 三月性をかよひる余野原へ詣天川を望み
トあくわくして名利を機振ふがまきと作業をあく
愁ふやとあく人とまよふぬすとお氣ぐ人の爲めにまよ
子小萬 云々と達すよとよすに筆記せりと之よ
浮うるよとおちれどあの方崩つて紫庭の庭花より及
有りてかの年松とちの扇ひよりて月宮をあれどか
とまよふしもと一被りやむ功主と耶邪の事ある

トアキシテ社ノ爲歟の御詩とあくへて補佐のふと
あらじもとせよあらゆれども様の一宇とをうりて
佐志の文字と詮を下すと佐志が花と云ふ
一戸葉舟の文とぞとす

○註曰△文選△客難事言△朔日加朝等事所謂曉也於朝庭
之間也何以深山高岸之下云△異同集ニ盧生
耶鄧ノ松ノ皮アリ世ノ知し所ナリ細舉ニ及ス
模尼賀也而暖其皮、壁、僵圓其形、避邪、△古居日、
然則以辟之、△食夢タ之詮說、△歌極ス、
節序紀孫モハ模ノ論アリト松ノ木ニ書き來テ苦方野
ハ模ノ觀音モアリ謾ニ隨テ故矣ヲ用レ△万葉錄ト、

御名遣、夏半カラ佐志、古風ノ體六十竹文ヲ昇下セシナリ
○ほ云け籍と空を死ナリテ孫は佐志の文字より公私二用
とをさうやまくすねのう従は人和の虚玄とひんき
やく文傳の慶海とちからて往と云一作者と紀雄
協田年あり、唐南のは阜山と傳て郡令下の旧官社
公傳の傳力より能作とあるす店門の店者と云ふ也

○説類

木履説

藤之任

アヒテ木履のちよか形乞、後之行者ばらすなり、神園
の灯と角とぼくすれ牛、ひたの壁と筋によく切の

そ進て乞者に作のねあそや稀櫻とやうり仰
立せまくから桐とうのせせむらもとよりある人へ
モトヨウ跡をつねもやもととすとすと
あとがよ育へきは實の金わざとやそめらと
喜樂をぬやれどもよのとよたてあつておひら
ひやとあるおはれと美運とあるまく行當の本店
あんづりとおあくと院宇う處と宣べて隠り
の毫毛とあくととをものと廢だらしとらまをせ
じくとを事とあらまとおほひのとくあり
るじあ花ひりとやうとあれと並えやえんで

錦^錦りて本麿を切り射ゆ度やうと伸あらむとて
狼藉のばほとすを垣のあくとく葉^{クク}ぬとすむ
とくとれとかまねかや黄^{イエ}とくとくとけぬと
せあとせ皆參むちまう度^{シテ}とよばねみの鳥
猪とあくとあらもむの射^{スル}よめうとくとあれ
まくとく。併^{シテ}筋^{スル}ふきとせとあつとと様^{トト}
まくせまん猪とく行^{ハシ}まくとあつとと居^{イサリ}とすを
もととくとれておのあらゆ。ほとくとこすと所の美^ヒ
とくとくい意^{イニ}背^{ハタケ}を仰^{ハシマ}の猪孫^{トコロ}とくとく威^{カミ}男^ノ
の化^{ハシマ}りとけやんきとくとく非^{ハシマ}のま^{ハシマ}あ^{ハシマ}と

卷五

敏秀が至る所とくわやかなる所
そよぐとらむ

○詩曰△役行者、元亨叔擊夷ニ傳アリ木履ノ吉爻ハ別書ニ云
△本朝軍史ニ平、忠盛カ火燃ラ抱留ルト夏王△牛若丸
ノ千人也モ世ノ知レル所ニテ細參ニ及ハス△梅檀高樹ハム經
說ナリ木履高齋セヌハ寓言ナリ△重みヨリ落スル之未仙人
ナリ詣書ニ在リ細參ニ及ハス △玉錦トハ通ノ松詞ニ稱ナリ
盲人ノ書ハ錦ト玉錦ト柱ラ重ナテ金ト云イ馬畫異ト云ヘ
ル文ノ新緒ハ重ミシテホ等ラ錯綜ノ絶妙ト稀スレ △晋史ニ
謝玄運好登山嘗着木履一上山ヨリ前、蓮下山去
後、止焉△晋史ニ或人有詣院掌一見テ其鰐履_{立ヲ}歎曰未知
一生高着_ノ此_ノ豈_ノ量_ノ履△五帝以下ヨリ軒ノ妻ニテハ源氏ニ

久良美ノ發入すり事書ニ見ル一編スルニ錦や路ハ名有る年二月ヲ
覆ヒテ常ニ水ラ灌ク故ニ多ハ木履ラ帶ナリ此等ラ諸語隋朝
ト知レ。○古今ノ傳书记亦嘗て此等の事ニあらう川 ゆわも
あらゆれどもせよがんりやわくとあり。○以れ等
古事記とけりくそんむ、とあるむじゆとやくわちうがくしん
△中陰廷草木國土志に自咸以法を經ノ亀支成ひリ暨
支成甲子ノ夏アリ細舉ニ及ハス

○ほへ云はばをく説射とひづれり候まく放す
と云ふ古語と特よ津久虚訛あらんや事うと
伊勢う賣ふる今や盡裏の次事ともうては哀帝
の事と云ふて云に達笑の詠謡ともれや作歌の序
申すて底の聲下すと嘉領を載り市中の聞と極て又驚

卷之三

左山

卷五

世

○註曰鳥聲辭黃帝下新木丘特地馬向之擇
亦多後瑞ニ鳥聲辭上寓言ニサ焉帝始祖之年ニヤ
傳錄ハ序號也古記ニアリ前ニ出焉
混沌而生○後成之子系也此之謂也
りらりやとくにああかす
●東坡句詩鑒破
△論語四世忠惠
班乎力弱歌ハ前ニ出たり△源氏明る美
生きあつてあつてあり△高麗山川万葉と合て
やうやくへいかよんほゆともつ

○運命は説を全く詠誇すにて、皆の事の如くよ
うちかのどうりやうて、虚説あつたといふああ、あれ
も虚よとも奚とあれよて、文章の優游とけ、角
あくくはやくても、いかに仕事の外と金のすまとつひを
て、群にはまきまねとも、まきひきり、葡萄の段落と称せ
作名を伊勢のあはる工作と、佐々木年中の古をすり
ぬ駄えむこと、また人あらわし

眼五說

東莞坊

けあつてこの代の風氣ありますと心と眼不自由で文章を
眠遊とつかはれ遊行を我身もまたおこなひてゐる

らやうやうもよ候五とおを坊もあひて今よまと
やう色をもくゆつの風雅とく睡も一きりの五とあり
ちよねむりうねまわくよむりうねじよおもと
うて候はよおもすせなれ天に人て候く付と
ちせくのあれよかうきてようだんと見ひる
のソヒ也次ノ月もて候く付と月もくまもと同
そくおれとくの風雅とよもじくは月の事ふくれ
トよひもやて候はよ睡く付とせゆゑを候はんと
そちきがふの様の音に耳とせきうちも月よさよ
そん時よあひれあへ新刊の念序よほさんよ

ひやけみのあと睡うやくあら奉よるふのまほを
まく一はれとくあら床やねやくのせ下のうき名
うるうとくとく一難とかくすりのや

○ほ云け詩を虚詐あく睡く五のあと破るよ例のきい
く例のわくくことく説の當用とく一またにはよ
哉の書は傳て石蔭後う邊うて一而の新音をうちどり
月をうへる好の名言とめうと作よんばるの諸語とひよ
あら茶と石の嚴言とくとく一而の起結とくとあへやくさん
さて註解の筆をもとくとく文と篇の用とわざに

摺録說

陳素六

むくかぬくと頼朝年を朱櫻朱あらよた風

もとよりのや堂とまゝをあひてきみせく 塵^{ウツバ}乞^{ハシ}の
振^{ハラ}方^{カタ}とあつまく殿^ののすあうとれども。セ卿^{シキ}
とまゝとて、ててたわ軍^のは付^{ハシ}とへ遙^{ハシ}たり。北
尾^{ハサ}まし。おほれ^ハ餅^ヒ米^{コメ}の殿^のとや^{ハシ}とて、
枝^{ハシ}子^ヲと^{ハシ}握^{ハシ}あ^{ハシ}を握^{ハシ}りてあつまとす。やがて
名^{ハシ}もれあくと^{ハシ}搔^{ハシ}餅^ヒと^{ハシ}とまづ^{ハシ}まばた^{ハシ}入^{ハシ}
手^{ハシ}餅^ヒ食^{ハシ}おうつる。うけ合^{ハシ}い。まくの假^{ハシ}合^{ハシ}
とかくとも^{ハシ}もむかをねがひ。久^{ハシ}餅^ヒと^{ハシ}搔^{ハシ}餅^ヒみ
を名^{ハシ}のみ用^{ハシ}すまう。モ色^{ハシ}あれ。兼好^{ハシ}のほれく。竹
の^{ハシ}いわらあきと^{ハシ}とむと^{ハシ}と^{ハシ}敵^{ハシ}と^{ハシ}まくと^{ハシ}お^{ハシ}

さのら飯家^のは付^{ハシ}とひまくと^{ハシ}ふのが^{ハシ}らひより
よひて風流^とあすと^{ハシ}おん^{ハシ}皆^{ハシ}米^{コメ}のそ^{ハシ}櫻^{ハシ}も^{ハシ}す
さきとくとく。もと^{ハシ}と^{ハシ}の^{ハシ}お^{ハシ}子^{ハシ}櫻^{ハシ}と^{ハシ}に^{ハシ}り^{ハシ}
と^{ハシ}うち^{ハシ}お^{ハシ}例^{ハシ}の^{ハシ}お^{ハシ}と^{ハシ}ま^{ハシ}れ^{ハシ}を^{ハシ}かくと^{ハシ}り^{ハシ}
と^{ハシ}う^{ハシ}牡丹^餅と^{ハシ}う^{ハシ}と^{ハシ}あると^{ハシ}今^{ハシ}の^{ハシ}せの裡^{ハシ}
と^{ハシ}船^{ハシ}と^{ハシ}森^{ハシ}の^{ハシ}も^{ハシ}ふ^{ハシ}あれと^{ハシ}う^{ハシ}と^{ハシ}強^{ハシ}殿^{ハシ}と^{ハシ}
お^{ハシ}飯^{ハシ}と^{ハシ}と^{ハシ}お^{ハシ}が^{ハシ}も^{ハシ}櫻^{ハシ}お^{ハシ}の^{ハシ}う^{ハシ}と^{ハシ}
う^{ハシ}櫻^{ハシ}と^{ハシ}と^{ハシ}お^{ハシ}が^{ハシ}も^{ハシ}櫻^{ハシ}お^{ハシ}の^{ハシ}う^{ハシ}と^{ハシ}
お^{ハシ}各^{ハシ}と^{ハシ}と^{ハシ}お^{ハシ}が^{ハシ}も^{ハシ}櫻^{ハシ}お^{ハシ}の^{ハシ}う^{ハシ}と^{ハシ}
の^{ハシ}音^{ハシ}と^{ハシ}あ^{ハシ}は^{ハシ}と^{ハシ}障^{ハシ}と^{ハシ}と^{ハシ}お^{ハシ}と^{ハシ}お^{ハシ}と^{ハシ}

ちの川のほとりとすねね舟とよがれも又ア
けはらひたゞくあわくをとの和あめりてありらひの
中子ととするにうととひくとひふきる
かのからむちうて行へるもあまえとくあと
ひじうせうやむもれ色くとあまきのまくら
麻とおとめの秋うらむ餘よ沙羅のゑ代とく富
自在とえよひうと舟とする餘のむじて小舟
さすし餘のふるれと捨餘をうむせすきわ
船舟をすと耳ちうたにちうちとしわちう
○註曰東鎧千葉が常能軒スウシラム或說ニ塙飯云

以スか宣ヲ用エトフ定家卿ハ賴家公ノ和歌ノ師ナリ入道後
ニ鎌倉ニ下り玉フ吉又アリトソ掬スルニ改ハ定家卿ニ假名遣
ノ撰アルヨリゆきく風いヘノ論ヲ設テ穴ト撰トノニ用フ顯ハス
キハ先師ノ文和詞ニ和訓ニ假名真名ノ兩用ヲ知チハ詩ノ明ヌ
真ナリトハ等々手筆ラニルニヤ 今在く竹とて手本ア
出手もあうとにかのからぬとぞともとあり ○あめの名
アモトナリてかうきうり歌體のありといせの陰秋
△高川夜舟上人健談ニシテ豪毛知ラヌ良ノ形容ナリ掬スルニ
一財別名以下ハ冬錯綿ノ術アリトミシテハ難波トエイ伊勢ト
エイ善源ノ所はト太騒ナルモ早竟ヘ音ノ字ニテ前後ノ角ヲ
結シトナリ然ニ散頭ノ格ニ微テ休等ラニシテ夢ノ絶妙ト称
スレ △古鼎有楚唱歌ニ跡とすと名す名サ在荷とす

多の文富も自在實加あざつてあり
○ほへじほと例ありて右の事にかの辭と新
いまとくの通語と御の风格となりてこれれば
他説の名說うて耳じうといひ口わざとする一篇
の詠文と称されしとひよのをすら爾れ
の寓言よりてかん作をと併序の章名と云うて
或々京師上京を或々と尾聲と云ひて陳も較うて
佐と都と民ととまきと尾聲下の能名ちやうせんと
一興ふ各の風すとつづく

文選卷之五終



